

---

# 嘘と珈琲

らんちゆ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘘と珈琲

### 【Nコード】

N6043Y

### 【作者名】

らんちゅ

### 【あらすじ】

恋姫の世界に來た京理、黄巾の乱や反董卓連合の戦いを経て辿り着いた先には何があるのか。

前作『夢の跡』の続編になり、設定を引き継いでいますのでそちらをご覧になられてから見ていただけると良いかと思えます。

チャイルドシート（前書き）

第2部はじまりはじまり

## チャイルドシート

???? side

無駄に長いここがどこかそういう堅苦しい事は後で説明する。  
いや、そうせざるを得ないので勘弁してください。

「ちょっと、あまり動かないでもらえるかしら？座り心地悪くなっ  
たんじゃないかしら？」

「.....」

何故なら俺の膝の上に乗ってるサド気質旺盛なこの女王様を何とか  
したいから。

てか、乗ったの初めてだろ？そもそも人間の座り心地が悪いってな  
んですか.....

「.....」

それを微妙に苦々しく微笑みながら見る周りの皆さん。

桂花もその内の一人だが華琳にゾッコンの思いと板挟みになってる  
らしく、頭を抱えてあたふたしている。

とある2匹？の小動物のようで凄く.....可愛いです。  
いや、普段の行動からするとこっちの方がレア度があるからその分  
上か。

俺の副長である莉羅と星は場所等関係無く怒り猛っている。

それさえ無ければ星はともかく莉羅は完璧なんだがね。

星はそれに加えてメンマ話を控えて貰おうかな。部屋に缶詰にされ  
て8時間耐久とか勘弁してくれ。

今、莉羅と星を副長と言ったが正しくは違う。俺は常に隊を持っている訳ではないので側近という言葉がピッタリかもしれない。

「ちよつと、足動かさない！」

「・・・はい。」

私、みや宮 きょうり京理 20歳。

天の世界では成人を迎えるお年頃、と同時に別の大人への道に目覚め、もとい強制連行されそうです。

は！？まさか尻に敷かれるとは、この事を言うのか。その更に発展したものが・・・皆まで言っまい。

まさか人生の中でそんな事を知る事になるとは。人生一寸先は・・・。

「で、俺はいつから華琳の椅子に？」

忌々しい金髪ドリルに話しかける。

「いつまでも、よ。というより椅子と分かっているんでしょう？話す椅子なんて聞いた事が無いけれど？」

そんな事をデスマイルで言う。こいつは本気だ。

だけど、そんな笑顔でも可愛いんだよ、クソ・・・。

「そう？天の国では喋る椅子はデフォ、当たり前だよ？標準装備。」

そういえば、ここからじゃ見つらいが椅子に座っている俺に座っているせいでおそらくというか絶対に足が地面に付いてない。

「ぶつ。チャイルドシートみたいだ。」

色々小さ

ギユー！！

「ぎゃあああああああああ！！！！」

「あら？だから急に暴れないでもらえる？また座り心地が悪くなるわ。」

ケツを思いつきり抓られた。

迂闊だったあ！ついこっちに来てからのいつもの癖で横文字で悪口を言ってしまった。

他の人は？マークを頭に浮かべるだけなので大丈夫なのだが残念ながら一刀と華琳には通用しない。

と、丁度良い。これについて多少掻い摘んで説明しようか。

長安、虎牢関の戦いにおいて俺達は負けた。正確には闘って負けたのではなく降伏という形でだが。

策に嵌ったとはいえ既に居ない人物を攻めたという恥を諸侯達は知られたくない為にそれは極秘にされた。

そして、詠や華雄に猛反対にあつたが俺達が負けを認め降伏する事で諸侯達は確かに風評と言う物を得る事が出来た。

ここが華琳の凄い所だ。策に嵌めておきながら諸侯達は本来の目的である風評を『恥の上塗りをしていた』とはいえ得た為、強く言えない。

これが俺と華琳の共謀でした、というのなら話は簡単だったが今回諸侯達は結果として自分達が欲しかった物を手に入れている。

特殊なタイプの飴と鞭、だろうか。

簡単に言えば、貴方達を騙しました、でも私のおかげで風評は手に入ったでしょう？というスタンスだ。

そこには、それを横暴だ！というのなら亡き董卓を攻めた上、私の掌で踊らされていたお馬鹿さんという事を言いますよ？という事を暗に仄めかしている事も含まれている。

諸侯達は董卓を討伐しなかったのではなくその副産物である風評を得たかったのが、華琳には分かっていた。

劉備のように本当に国の為、ひいては民の為を思っていた者も居たが大半は風評が目当てだったのが事実である。

華琳を悪者だ！と言う「自分も悪者です！

と言った式が出来上がっている訳だ。

華琳こえー

と、言ったらまたやられそうな

ギユウ！！

「ぎゃあああああああああ！！！」

はい、完全に心読まれてました。

閑話休題

会議で俺達は生きる為に降伏と言う形を選んだ。

事実、あそこで俺が諸侯を皆殺しにしようが数の暴力には敵わない。

おそらく両側から軍を前に進めるだけでこちらが壊滅するのは目に見えていただろう。

諸侯の、自分の命惜しさに賭けたが華琳が居る時点でアウトだった。少し意外だったのは鮑信もそれに気付いていたという事だが。ともかくその時華琳は独断で俺達を華琳の傘下に入れる事を条件に出した。

もちろん反対の嵐だったが、俺自身がOKを出したのと手柄を曹操軍が全て放棄する事で合意に至った。

これは桂花と風の考えらしいが、今回の戦いで俺の価値を再確認出来たらしくそれに比べれば今回の風評等ちっぽけな物らしい。

最後まで反対した人物？それはもちろんその意味を知る鮑信。

何度も他の諸侯にその危険性を伝えていたが、既に目的の物を得てもう曹操に関わりたく無かった諸侯には分かってもらえずそのまま多数決で決まった。

で、今居るのがここ、許昌という訳だ。

俺はあつた事知つた事を全て詠達に告げると、曹操は本当に同じ人間か？って返事が返ってきました。

正直、今までの話は俺にとっては本当にどうでもいい。

華琳が姉であるかどうか、これだけを聞きたかった。

が、許昌に着いてからからいきなり膨大な書簡（全体のおよそ1/4）を俺にだけ渡され、それを全て処理するのに2週間ほど掛かった。

朱里や雛理、一刀等色々な人物が差し入れに来てくれた。



だが、ある一部の人物は自分を差し入れと評してそこから侵入してきたのは全然些細じゃない余談である。

それをようやく終えたと思ったら

『大した早さね。さて、次は椅子になりなさい。』

そして現在に至る。

「華琳、お前は俺の姉・・・で良いのか？」

急にそんな事を口走ってみる。

「違うわ。」

・・・。

「私はそんな事一言も言っていないけれど？」

口調は違えどこのサド気質でいやらしい嫌がらせをしてくるこの少女、絶対姉さんだ・・・。

が、その後も得意の話術で言い包められて結局未だに確証は無いのが現状だ。

「さて、とりあえず皆自己紹介は済んでいるわね？」

マジな声を出しているがそれが俺の膝の上から発せられているのは何だか悲しい。

「あのさ？話の前にそろそろ降りない？」

「嫌よ。」

「一応聞くけどなんで？」

「貴方は私の物でしょう？」

想像通り過ぎて泣いた。

## チャイルドシート（後書き）

感想、評価よろしくお願ひします。

しばらく拠点の話が続きます？

## 要約（前書き）

2話目です。

感想・評価ありがとうございます。

雪蓮 side

「あゝ、むかつくわね。」

降伏の件で京理含む董卓軍は華琳の下に付く事になったが、袁術と私達は自由にしていいと言われた。

今考えても腹が立つわね！

曹操の、まるで京理さえ手に入れれば私達は目に掛けるまでも無いというようなあの態度、無理矢理京理強奪すれば良かったわ。だけど、もっと気に食わないのはそれを京理が認めたという事よ。

「姉様、日頃から言葉は選んでください。」

「はいはい、口うるさい妹ね。全く誰に似たのやら。」

「何か言ったか？」

振り向くとそこには我らが軍師、冥琳がいた。

「何でも無いわよ。」

・・・口うるささで言えば我が軍の2大人物ね。

「また、京理の事でも考えているのか？」

ニヤリと口を歪ませながら言ってくる。

「ええそうよ！あゝもう曹操もムカつくけど京理はもっとムカつくー！」

「はあ。雪蓮、こころは考えられないか？」

「何よ？」

「私達には孫呉の再興という目標がある。唯でさえ袁術の下で客将なんかをやっているというのに今回の戦いで風評すら失ってしまったら我々はどうなる？」

「あ……。」

「絶対に勝てると言って誘ってきたのは向こうだ。」

であればこんな結果になった今、周りに宮 京理としての敗北と曹操への降伏をこの戦いの表顔とする事で、それを印象付け、我々への意識は確実に小さくなる。

何しろ、あんな事があつたなら諸侯達は尚更だ。」

「……でも。」

「お前も、京理の意図が知りたくて今もここに居るんだろう？」

「……そう、私達は今許昌に居る。」

あの戦の後、曹操に無理を言っただけで付いてきたのだ。

だって、勝手に言われて納得できる筈無いでしょう？」

それに京理と仕合うのだから楽しんでるに。」

まあ、確かに曹操の下に行くのは苦痛だけだね。

ただ私の戦心が京理を求めて仕方無いのよ。」

だって、冥琳より頭が良いかもしれない上に武勇においてはあの呂布をすら凌駕するんでしょう？  
絵に描いたような最強。武人がこんな人間に興味を持たない筈がない。

京理 side

不幸とは突然やってくる。

「という事で明日昼前から仕合するから。」

こんな風に……。

ノックもせずに部屋に入ってきた途端そんな事を言いだす江東の虎の娘。

ああ、そういえばそんな習慣無いんだっけか。

「一言目がそれか。拒否権は？」

「無いわ」

キラッ、じゃねーよ……。

「で、華琳はそれについてどう思」

「許可。」

「……さいですか。」

一縷の望みに賭けたけど案の定でした、はい。

「ふふ、ただし孫策よ。」

「何よ?」

名前を呼ばれて明らかに不快そうな顔をする雪蓮。やっぱり降伏には納得してないからか敵意を剥き出しにしている。

普通の君主ならその時点でアウトだが流石華琳、器がでかいよ。

「どうせなら大会を開きましょう。京理と戦いたって人間は貴女だけじゃないのよ。」

「は?」

「形式は?」

「そうね……。トーナメント、勝ちあがり形式がいいわね。」

「あの」

「場所と日時は?」

「追って連絡するわ。」

「ちょっと」

「分かったわ。」

今までの話、雪蓮が部屋に入ってきてからほんの150秒ほどの出来事でした……。



「・・・あの、華琳さん？」

「何かしら？」

斜め前に座っている華琳を見ると恍惚とした表情をしていた。

そう、昨日ようやく喋る椅子を卒業する事が出来た俺は2週間振りに膝の上に何も乗せない生活を送れている。

って、そんな事は今はどうでもいい！

どうでも良くは無けれどこれに比べれば！

「ルールはどうするんだよ？」

「形式はさっきの通りで、大会優勝者が京理への挑戦権と1日デート権を得る。」

立ち位置的にはスーパーチャンピオンってところね。」

横文字に横文字で答える華琳に違和感を感じなくなったのは俺が変になったからだろうか。  
って・・・。

「1日デート権！？なんだその券みたいなのは。」

天の国では人権ってのがあってな、それによると俺にも拒否権という物が」

「ここは漢よ？」

「・・・そうですね。」

話術じゃ勝てねえ・・・分かってたけど。

思えば話術だけなら華琳が最強、次点で風などが入るが俺にはそこまでの話術は無い。

てか、急展開かつテンプレ過ぎて何か付いていけないよ……。とりあえず、参加できない文官の反発は凄そうだな。なんて今でも客観的に考えていられる俺は凄と思う。

莉羅 side

「せいっ！」

「やあ！」

「うるあ！」

「ぶるあああ！」

「たあ！」

最近妙に鍛錬場の使用者が多いと思ったら成る程、そういう事ですか。

城内にある貼りだしを見ると『天下大会』の4文字。

何の飾りも無いその言葉に感動を覚えました。

曹操殿、これは京理様争奪戦と考えていいのですよね？

そう考えると不思議とニヤけてしまう。

見た感じで出場しそうなのは愛紗、鈴々、星、恋、華雄、夏侯惇、夏侯淵、許子ヨ、典韋、楽進、雪蓮、孫権、黄蓋、甘寧、周泰と言った所でしょうか。

私も含めて16名……かなり多いですね。

目的としましては、京理様に対して不埒な考え（色恋事含む）を抱

いている輩を排除する事。

それに、もし優勝できたなら合法的かつ白昼堂々と・・・やれる。

## 憂鬱（後書き）

莉羅に対して一言

「今日のお前が言うなスレはここですか？」

戦闘シーンを描けない作者自身に喝を入れるかの如く無理矢理大会を開催するという暴挙に走ってみました。

夢跡では文官の活躍が多かったので今回は武將にスポットをあててみます。

感想、評価よろしく願います。

前夜考察（前書き）

前話の調練場に一人変な声が（ry

## 前夜考察

華琳 side

桂花を閨に侍らせている中、ふと気になった。

「桂花、貴方はどう見るかしら？」

「大会の事でしょうか？」

でしたら呂布を筆頭に関羽、張飛、趙雲、孫策、馬鹿猪。この辺りが上位に食い込んでくると思います。

ですが、この戦いにおいて優勝するとしたら・・・私は羊コと考えます。」

急に決まった催しだったが真桜に無理を言って徹夜で会場を作ってもらった。

よって、大会は明日から行われる。」

「羊コ？あの京理の側近の？」

「はい。」

文武両道の王道を往くようなイメージだったのだけれど・・・。

「理由を聞かせてもらえるかしら？」

「・・・あの人物はそもそも人の下に付くような人物ではありません。」

「なぜそう思えるのかしら？そして勝つと思われる根拠を聞かせて頂戴。」

「羊コの中を見つけた事が無いからです。」

「それは文字通りの意味？」

「はい。」

武人でも無い文官である桂花がそう断言できるのだから余程の事なんでしょう。

確かに私も一度も見た事が無かったわね。

普通に生活していてそんな状況には成り得ない。

隙を見せないにしても少し異常だ。

それを自然に出来るのだからかなりの鍛錬を積んだんでしょうね。

何の為に？

それは分からないけれどそうせざるをえない状況にあったか、この乱世の中で必要だったから、はたまた愛する者の為に・・・なんてね。

「で、それが今回の大会にどう関係するのかしら？」

「その羊コが異常な執着を見せる程の人物が言わずと知れた京理様です。そして羊コはその半国の器の名に恥じぬ所かそれ以上の結果を出した人物とずっと一緒に居た。」

・・・純粋な武で言えば京理様を除けば呂布が頭一つ抜けています。が、経験というのは得難い物です。それがいざれ英雄になるお方の側に居たというのなら尚更の事。

華琳様、これは私の願望ですが。

戦ではなく、一対一の戦いにおいて知が武を上回った時、その先に何かあるのか私は見たいのかもしれないです。

それが私にとって何の意味を為すかは分かりませんがこの先の私が華琳様の支えになる時の一つの鍵になる気がします。」

「えらく評価するわね。」

「文官の私が何と言えいいのか分かりませんが、知力はもちろん純粋な武においてもあの女はかなりの物の気がします。」

「能ある鷹は爪を隠す、という事かしら？」

「予想としましては呂布に及ばずともそれに近い力を有している気がします。」

これは驚いたわね。

軍師は希望的観測はほとんど言わない。特に桂花のような者なら尚更だ。

羊コはここに居る中でおそらく一番京理を支えてきた人物。

隠してきた実力、そして京理との生活の中に何か得る物があつたとしたら？

ふふ、これは丁度良いわね。

今回が皆の実力の良い指標になるかもしれないわ。

「桂花、明日が楽しみね。」



「はい。」

外を見ると太陽が1日の仕事を終え、辺りは完全に黒に染まっていた。

京理     s i d e

「ふう……。もうこのパターンやめようよ、ねえ。」

小鳥の鳴き声が朝を報せる。

体を起こすといつもの如く当たり前のように俺の部屋に侵入している星と莉羅、それに風、恋、朱里、雛里+数匹。

前までは詠や桂花、愛紗や桃香も居たが詠はこの所ずっと部屋に引き籠っているのが、少々気がかりだ。

桂花は華琳と夜の……。

まあ、それは置いといて、最近はずをかけると毎朝ドアノブが切り取られた状態で発見される。修理、これの繰り返しになるのでもう完全にオープンにしている。

が、それを受け入れるという意味と勘違いされたらしく政務も俺の部屋に持って来てやろうとする位だ。

勘弁して下さい……。てか、物理的に無理だからね？8畳だよ？ここ。

そういえば、あそこに居た頃はもう一人居たな……。

守る事も出来ず最期を見る事も叶わず、そして俺達が負けた事で冤

罪も冤罪で無くなり

・・・俺はあの子に何をしてあげられたのか。否、何もしていない。理想だけを追い求める者は理想を抱いて死んでしまえばいい。みんなを守る事とある一人の少女の疑いを命を賭けて晴らす事、それは天秤にかけていい物でもないし比べる物でもない。でも、心のどこかでそういう風に自分を言葉で覆ってしまってるっていうのは、闘う前から諦めたって気持ちがあるって事なのかもしれない。

自分が思ってる事なのに・・・分からないよ。

「・・・朝から悲しそうな顔をしていますな。主を笑顔にするのも側近の役目ですからここは元気になる事をしなければ。」

ニヤリと笑う星。

「その通り、ですがそれは私の役目ですよ？星。」

・・・いや、半裸でそんなこと言ってんじゃねーよ。

「お兄さん、今日は何井ですかー？」

「そんなこと言うんじゃありません！」

こんな子に育てた覚えは無いぞ！

「おうおう兄さん」

「黙れHOUKEI！言わせねーよ？」

あくまで風の頭の上)ry

とりあえず、奴が喋る内容はロクな物が無い。

「あ、あのでしゅね！私達は」

ペロペロ

「であって」

ペロペロペロペロ

「・・・嫌い？」

ペロペロペロペロペロペロ

「ごめん、セキトに周々、善々俺が悪かったよ。嬉しいからもうやめて？」

朱里と雛里はペロペロ音で掻き消され、恋に至っては何の事を言っているのかまるで意味が分からない。  
という事で

「嫌いじゃないよ。」

って言うしか無くなる。

そして許昌に来てからこのやりとりを毎日続けている。

朝の時間濃すぎるだろ・・・。

ちなみに恋のペット達はここに来る時に、パンダ達は戦に付いて来ていたらしいので俺の部屋付近は軽い動物園である。とりあえず周

泰が良く来るけど、たまに甘寧が見れる。

それを眺めるのが俺の数少ない心のオアシス的存在になっている。  
ていうか……

「何で雪蓮まで居るんだよ……。」

とりあえず一通りツッコミを終えて冷静に考えたら普段居ない奴が居た。

「スースー。」

おやおや、孫呉の王様は良く寝る子なのね。

……雪蓮と恋は戦になると人が変わるからねえ、ちょっと得した……のか？

「普段も可愛いけど寝顔は見物料取れるなあ。」

ダメだこりゃ、周りに可愛い女の子がいっぱい居るともつそういう目で見れなくなっけそつだ。

これから始まる大会の事を考えてみた。

「誰が優勝するんだろうねえ。」

一番闘ってみたい相手……と言ったら実は杜預なんだけど出るかも分からないしやっぱり決勝は恋かなあ。

「ふ、そんな物。私に決まっているだろう！」

声の主はバンツ！と大きな音を立てて扉を吹っ飛ばして入ってきた。

「・・・朝から元気ね、華雄。」

ハハハ、これで扉の修理費また華琳に借金ダヨ・・・。

ともかく、月。俺はみんなと元気にやっています。

お前もここに居れば、とかそついう事は口に出さないけどやっぱり

会いたいよ・・・。

## 前夜考察（後書き）

ネタ路線でいこうとしたらいつの間にかちょっぴりシリアスになってました。

次回から戦闘描写となりますが過度な期待は禁物です。

で、誰と誰とを闘わせるかまだ全然考えてないんですが希望あればお願いします。

## 開催（前書き）

リクエストは無かったので初戦はテケトーに決めました。

実況とかも考えましたがマンドクセってなったので省いてます。

というか戦闘自体もVS京理も含めるとかなりの回数あるのでどうかすっ飛ばす可能性高いです（笑

評価、お気に入り登録して下さった方々ありがとうございます。

## 開催

京理 side

現代の10時頃に大会の開会式は始まった。

運動会で言うスポーツマンシップ云々を愛紗が長々しく語っていたが一部を除いて皆スルー。

何を言おうがこのご時世、勝った者勝ち、所詮は弱肉強食なのだ。

『正々堂々？どんな手を使ってでも勝った者が栄光を手にするのよ。』

って、このお隣の方が言っていました。はい。

「おいおい、物騒なこと言うなよ。それに同じ条件下っていうこういう大会だからこそみんなの実力が分かるんじゃないか。」

ナイスだ一刀！その通り。

「何も分かっていない天の御使いかぶれの貴方は黙っていなさい。相手より多くの兵を、それが兵法の基本でしょう？」

その時点でこの戦乱の世でもそもそもの同じ条件下の戦いになるなんて状況がどれだけあるのかしら？少なくとも貴方がここに来てからはあつた？」

「・・・無い。」

一刀、喋り始めて早々敢え無く撃沈。

そりゃそうだ、一刀は弱小の、勢力と言えないような義勇兵の集ま



りから始まったのだ。

ここまで生き残ってくるのにむしろこちらより策を弄したのではないだろうか？

いくら率いる武将や軍師が強くても勝てる訳ではない。それだけの兵力差が周りであった。

知識だけだったのかは分からないが少なくとも一刀は桃香達の勢力において重要な役割を果たしていただろう。

だから、出来ればそのまま天下にまで突き進んで欲しかったが桃香は俺に付く事を選んでしまった。

俺はなにか董卓軍の有利の為だけにここに居る事を許可したが、正直桃香は少し甘いだけで今ならまだ上を目指せるんじゃないだろうか？

今でも、劉備軍全員がこのままでいいと思っていようがそれを俺がそれを納得している訳ではない。

「どんな天下無双もそれ以上の策に嵌れば勝つ事は出来ないのよ。」

ニヤリと色っぽい笑みを浮かばせながら華琳がこちらに顔を向けてくる。

そして、そんな光景を眼力で人を殺す位の強さで見ってくる元董袁連合の皆様。

「華琳、お前本当に殺されるぞ？」

顔を近づけ小声で言うと、

「その前に私にこんな事をしている貴方が殺されると思うのだけれど？」

「……へ？」



「とうか、もう始まつてる?」

目の前はお互い力の限りを尽くして戦う二人の姿。

「お前がブラックアウトしている間にな。」

「一刀、起こしてくれよ!」

「ごめん、ちょっと気分良かったわ。」

こいつコロス……。

「っと、審判は張三姉妹か。あいつら巡回公演から戻ってきたんだな。」

華琳は張三姉妹のファンを増やす事でそいつらをそのまま軍に誘い吸収。

そしてそいつらにたまに公演を見せる事で士気向上にもなり、本人達もやりたかった事が出来るといふ事で今も頑張っているようだ。

「あの子達は今日はいつも以上に頑張っているわよ。」

「そうか、聞くだけでなく実際に頑張ってる姿も見れて何よりだ。」

失われる筈だった人の笑顔を守れたっていうのはこんなに気持ちのいい物なのか……。

天下を目指す理由がこんなちっぽけな物でも充分なんじゃないだろうか?

星 side

「ふ、我が勇姿、一番見て欲しい人は考え事か……。」

愛紗じゃないが、後できつい灸を据えるところ。

「余所見なんてしてて大丈夫です、か！」

「ぬっ！」

3回斬ってくるか。袈裟切りからの突き、そして回転切り。どれもキレがあり申し分ない速さがある。

特に回転切りは曲芸のような動きだがなるほど、理に適っている。力という身体の特徴差を埋める為に遠心力を利用する、単純であるが周泰程の速度があれば充分武器に成り得るだろう。

「それが残念ながら主の前なのでな、負けようとも思わないし負けられないのだ。」

好いた男の前では格好つけたくなるのが女の性だろうか？ふっ！」

ガキイ！

「っ！」

そのまま一度お互い間を開ける。それが出来れば私は槍で周泰は刀

とかいう剣だ、いくら長物の剣とは言え槍には劣る。

であれば武器の攻撃範囲の差と純粹なぶつかり合いだけなら私が負ける可能性は限りなく低くなる。

それでも周泰は私と同じ速度重視の闘い方だ。同じ速度重視と言っても奴の速さは大陸一なのではないかと思う位なのが問題なのだが・

一瞬の気の緩みが勝敗を分ける致命的な物に成りかねない。  
今の攻撃で尚更に距離を取れた事は大きいだろう。

「ふ、それで終わりか？周泰よ。一武将として孫呉の名が泣くぞ！  
？」

「っ！！言わせておけば！はっ！」

キレはあるのだが怒りに身を任せた攻撃で至極単調。そして間合い外からの攻撃、であれば私が避けられない道理は無い！

「はあ！！！」

ガキイイイン！

「あっ！」

斜めに振り下ろした刀を身を反らすだけの最低限の動きで避けながら逆に周泰の間合い内に入り込み、己の槍を半分程の短さで握り素早く相手の武器に向かって振り下ろす。

後はそのまま穂先を前に出す。

「・・・私の勝ちだな。」

「勝者、趙雲！」

地和が勝ち鬨のように高らかに叫ぶ。

「あうー。」

ふむ、やはり勝者の立場というのは気分が良いな。

これで主が私の勝ち様を見届けていてくれたなら・・・  
そう思い、半ば諦め気分でそちらを向くと

「良くやったな、星。まずは初戦突破な、おめでとう。」

主が私の活躍を見てくれていた。

どうでも良い事だがそれだけで嬉しくなってしまう。これもまた惚れた弱みなのだろう。

ナデナデナデナデ

「っ！それで私が喜ぶと？」

「うん。」

即答。流石は主・・・敵いませんな。

## 開催（後書き）

ん？最近何故か一刀を無性に応援したくなる気分になってきた。

とりあえず、結構こういう大会ではあて馬的存在の凧を頑張らせてあげたい！

引き続き対戦の組み合わせ募集しております。

変わる物と変わらない者（前書き）

どうしてこうなった・・・。



## 変わる物と変わらない者

京理 side

「うーん、周泰は惜しかったなあ。」

試合終了後、開口一番に残念そうな顔を浮かべながら言う一刀。

「純粋な速さで言えば周泰の方が上だからな。それだけに星に言葉で惑わされたつてのは少し頂けないね。」

どんなに速さがあるうと、どんなに技術を持っていても、それを100%発揮するだけの胆力が無いと意味がない。

まあ、戦場でなく今分かる事が出来たんだからこの大会にも意義が感じられるようになってきたな。」

「100パーせんど?」

「完全につて意味だよ。」

しかし、この戦い裏を返せば星が如何にクレバーか分かるんだが・  
・まあ、気付いているのはほとんどいらないだろうし言わなくても良いか。

それに星の視線が言うなつて言ってるからな。秘蔵メンマをとられた時のような殺意にも似た顔をしている。  
まあ、いい。それより

「人和、次の対戦の組み合わせ教えてもらえる?」

「ええ、久しぶり。次は、張飛ちゃんと羊コさんよ。」

「!?!」

・・・マジか。

「京理、貴方はどう見るかしら?」

「おそらく莉羅の勝ちだな。」

いや、むしろ断言できる。

「何故?」

「自分で言うのもなんだけど、多分この大会の景品が景品だからな・  
・・・」

「「「「・・・なるほど。」」」」

満場一致だった。自分の事じゃないけど目から何か出てきた。

・・・今までも何度か言ってきたけど、あれさえ無ければ非の打ち所がない人物なんだが、そのあれたのが色々致命的だからねえ。まあ、それが無かったとしても華琳や雪蓮のように上に立つ人物か? って聞かれたら答えはNOかな。

王を補佐する事に異常な才能を示す者、王佐の才にこれ程恵まれている人物はこの大陸どこを探してもそうはいないだろう。

問題はその王が事象に絡むと状況判断能力が著しく低下するという唯一にして最大の弱点ではあるけどまあ、それもやりようによってはね。

鶏口牛後、こんな言葉があるが莉羅はまさにその正反対だと思う。

小さな組織ででかい顔してる莉羅は想像できないからな。まあ、逆に大きな組織で軽んじられている事もあり得ないが……。

頼めば大抵の事が出来る何でも屋。前に1分以内に春灯を俺の部屋につて冗談で言ったら40秒で連れてきたからなあ。

例が悪いが、とにかく莉羅という存在は大陸でもかなりの器を持っている者。ことNo.2に対する適正、才能であれば大陸一と断言できる。

ヒヒン。

……しかし今更だが春灯酷い目にあつたのかな？まあ、今言っても仕方ないから今度体でも洗ってあげるか。

あいつには迷惑かけたな。

ヒヒン……。

閑話休題

「鈴々莉羅お姉ちゃんには負けないもんねー。」

「ふふ、そもいかないのです。私は勝たなければならぬのですよ……景品のに。」

「「「「「……。「。「。「」

最後の部分が無ければカッコよかったのに……このお馬鹿野郎。

「むう、なんか初戦よりみんな元気が無い気がするのだ。」

「そんな事無いぞ、俺が応援してるからな。」

「にはは、じゃあ頑張れる気がするのだ。」

「……なんて現金な奴だ。」

義妹を嘆く姉の構図

「まあ、いいじゃないか。それに……気になるからね。」

「陶醉が可愛く見える程の異常な執着心と燕人張飛との勝敗の行方がかか？」

「ちげーよ!」

真顔で言ってるから恐ろしい。

てか、執着心V S 人ってどういう状況ですか？

「ええ、そうですね。一般的に考えて莉羅のそれは俄かには信じがたい話ですが是非で言えば是と言うしかありませんからね。気にもなるものです。」

「・・・愛紗までそういう事言っただ。」

まあ、確かにそうなんだけどね。

「!? あ、いえ。あのですね、私は一般的な意見を述べただけであつて決して私自身が嫌いとかそういうのではないのです!」

・・・一刀、ずっとこれと生活してたのか。色々ときついな、主に精神的に。

「はわはわ!」

「あわあわ!」

そこのおろおろしている小動物さん小動物さん、そこまで慌てられた状態でそばに居られるとこっちはわあわあになるんだけど?

「まあ、いいか。時間がもったいないし始めようか。」

・・・それに華琳が怒りそうだし。

「私の捕虜である貴方に対して命令よ」

「へ?」

「大会後、三角木馬の刑だから。」

憎々しいデスマイルめが・・・。

O r z

莉羅 side

「相手は鈴々ですか。」

目の前に居る朝一番に食堂でみんなに虎さんパンツを穿いているとカミングアウトしてきた子供を見据える。

頭はちよつとあれですが武においては天性の物がありますからね。

「お姉ちゃん、手加減は無しなのだ。こっちも本気でいくよ〜!」

「分かっていますよ。それはそうと今は昼前、おなか減っていますせんか?」

「減ってるけど・・・これで勝つたら京理お兄ちゃんにご馳走してもらえるからとつと終わらせるのだ!」

ウラヤマ・・・京理様には色々と聞きたい事がありますね。

「よ〜し、やるぞー!」

メラメラと音を立てていますがはてさて、どうしましょうか。  
燃え盛る火に対抗するにはどうすればいいか、答えは一つ。

「じゃあ、始めましょうか。」

水をかけてしまえば良いのです。

「うん、いつくよー！たあー！せいせいせいせい！」

「くっ！」

横薙ぎしてからの突きの応酬を3歩程大袈裟に距離をとる。

鈴々の武器の大きさはこちらのかなりの不利の要因になりますが

こっやって懐にはい

「させないのだ！」

ガキーン！

・・・ねませんね。

剣の横つばらを鈴々の槍に沿うように、滑るように近づいたがそれを槍を回転させ柄で足元を攻撃してきた。

野生の勘、とでもいいますよ。戦いにおいて必要である最低限の動きが頭ではなく本能で分かっている。

京理様のように相手の予想を遙かに上回る速さで攻撃できる訳ではないのでそれ以外で私が攻撃を入れる方法・・・ふふ、すぐに浮かんだら誰も苦労しないですね。

「まだまだいくよー！てやてやてやー！」

「ぐう！」

再び突きの応酬、槍袈とはまさにこれの事ですね。一人でそれを体現できるとはいやはや、燕人張飛の名に一片の偽りなしですね。





変わる物と変わらない者（後書き）

感想お願いします

## 飽和（前書き）

PC修理に出していたおかげですっかり遅くなりました。  
申し訳ございません。

## 飽和

京理 side

「お疲れ様。どうだった？鈴々は？」

汗の滴る額を拭いながらやってきた自分の腹心に労いの言葉をかける。

「はい、かなり、と言って良いほど強かったですね。」

「問題点は？」

「勘が良すぎる事、ですね。」

「無意識に人より優れた頼り過ぎるのが仇になってると？」

「その通りです。」

「ふむ。」

「元々、武のみでは私が鈴々に勝てる可能性は4度に1度勝てるかどうかですから。」

「改善策は？」

「京理様と生活を共にする事ですね。」

莉羅と淡白な会話を続けるというのは案外に面白い。

俺の言葉遊びも分かる事が多いし、比喻表現も大丈夫。

博識で武道に通じていて、一癖ある所を除けばこれと言って欠点が無い。むしろ全てが得意と言って良いレベル、だがそれこそが彼女の最大の欠点なのかもしれない。それは自分自身にも言える事だけだね。

つて、そんな事は今はどうでもいい。

「共にするってどういう？」

「ま・こ・と・に、不本意ではありませんが、全ての行動に根拠を必要とし、それを実践できるのは一握りの存在だけ。

太古の時代、本能の赴くまま生活していた動物達が進化していったのは理解する、知りたいというこれもまた本能に近い物からです。

そして、そのままで良いと進化を望まなかった者は世界という一つの器に淘汰されました。天変地異という天災をもってして。」

51

随分カッコいい厨二臭い言い方をするが、世界の変化に対応出来なかった動物達から絶滅していったのは確かな話だ。多分、敢えて言ってるんだらうな。

「つまり、鈴々はこのままではいけないと？」

「御自身でも分かっているのでしょうか？」

自然と悪人面にも近い笑みがこぼれる。

「俺が逆に鈴々に感化される可能性は？」

「あり得ませんね。私が知るなかで、もっとも芯の太い確固たる志を持つ人物こそが京理様なのですから。」

「ありがとう。俺なんかそんな贅辞を。」

「御謙遜を。」

「京理様、そろそろ鈴々が負けて理由を教えてくださいただけじゃないでしょうか？」

お互いに笑みを含みながらそんな事を話していると側に立っていた愛紗が不機嫌交じりに聞いてきた。

「ああ、そうだったね。」

そう、試合自体は鈴々が押し莉羅が押され、膠着状態でありながらも確かに鈴々優勢の展開だった。

だが勝ったのは莉羅、愛紗やその後ろに居る者達はその理由が知りたいのだ。

忘れかけてたが桃香や愛紗は鈴々とは義姉妹の関係、身内がやられた気分なんだろう。

「じゃあ説明するか。最もそれを理解できるかは微妙だけどね。」

愛紗 side

「その前にすまん、実は莉羅と鈴々が当たるように仕組んでいた

んだよ。」

説明するにあたって第一声がそれだった。

「な、何故そんな事を!？」

莉羅が腹心だから勝たせたかったのだろうか?そうして相性の良い鈴々を……

……待て、相性が良い?むしろ、戦場で他の事にも頭を巡らせなければならぬより唯目の前の敵を倒すだけの方が鈴々は強い。真つ勝負の武に置いて知力が介入する余地は無い……筈だ。

現に莉羅は懐から小刀を取り出してそれを投げつけ、それを鈴々が避けた先に『偶々』莉羅が居ただけなのだから。

「鈴々の為、かな?」

「どういう意味でしょうか?」

このお方は頭が良すぎるのが、頭は凡人である私にとっては少々つらい。

「うーん、じゃあ愛紗、今から攻撃するから避けてみて。受けてはだめだよ?」

「?御意。」

そう言って、構えをとる。

「いくよ?……ふっ!」

「っ！」

完璧に避けた・・・が

「待ってたよ。」

そう言っただけで避けた先にはいつの間にか私と肉薄するかの如く、お互いの吐息が当たる位近くに京理様が迫っていた。

「・・・いったい何がどうなって　。まさか動きを読んだのでしようか？」

「違うよ。今、愛紗は左に避けたよね？実はさ、分かってたんだよ。」

「！？それは読むというのではないのでしょうか？」

「読むってのは相手がこうするだろうなって憶測に近いものだろう？そうじゃなくて、分かってたんだよ。つまり、そういう事。唯、愛紗は鈴々程では無かった感じだったね。」

「・・・？」

「愛紗、人ってどうやって生きているか知ってる？」

「え、あ、息をする、とかでしょうか？」

「その通り、人は息をする。」

では、何で息をするか？それは血液という体を活動させる物を体に巡らせる為。

「どうやって？勿論、心臓だよね。」

「じゃあ愛紗、道に迷った時二つの道があります。右の道、左の道。どっちを選ぶ？」

「・・・左です。」

「だと思ってたよ。」

「分かっていたのですか？」

「今、心臓の話をしたよね？」

「はい。」

「じゃあ心臓は体のどの位置にある？」

「・・・中心です。」

「もっと言うと、自分から見て中心から『左』だよね。」

「・・・！！」

「天の世界じゃあまり有名じゃないけど一つの理論があつてね。」

人間は本当に危機に陥ると無意識に心臓を庇う行動に出る。

そういう時正面から心臓を遠ざける為に、左に向いてしまう。だから左の道を選ぶ人が割合的に見て多いんだよ。

で、それは本能にも近い物だから鈴々はそれが人並み以上に如実に表れやすい。」



「なんという……。」

「だから、莉羅が急に小刀を出して尚且つ投擲したから、あの瞬間鈴々は剣と小刀を両方対処しなくちゃならなくなつた。そうしたら何が起これると思う？」

「同時に来る攻撃を対処できない、同時に意表を突かれた行動に対応も限られる。……つまり、その勘が無意識に避けるという選択をした。」

「その通り、後はいくら身体能力がずば抜けている鈴々だつて人の子。避けた先に莉羅が居て既に目の前まで振り下ろされていた剣を避けられる道理は無いんだよ。」

「……流石は莉羅、と言うべきなのか。只者では無いと知っていたがよもやここまでとは。」

「ただし、同じ勘で動く奴でも雪蓮と恋には効かない。雪蓮の勘はもうサトリに近い物で、恋に至ってはそういう物じゃ覆せないほどの武を持っているからね。」

化け物だよ、と少し笑う表情はどこかイキイキしていた。

それを化け物というのであれば、私から見れば貴方の方が余程化け物です。

この人になら負けてもしょうがないと思えるほどの人物と改めて再認識出来たのは良かった。

## 飽和（後書き）

以上、莉羅& amp・愛紗回でした。

因みにこの理論多少自論入ってますので鵜呑みにしないようお願い  
します。

それと、心臓が血液のポンプとかを愛紗達知ってる知らないは正  
直何とも言えないので一応知ってるという設定で。

## 王佐の才と理（前書き）

後書きで募集事項がありますので目を通して頂けると助かります。

## 王佐の才と理

京理 side

「意外と小食なのね。」

「ん？一応午後は動くから。元々ってのもあるけど。」

横に居る孫権がまるで青色のタヌキ型もとい猫型ロボットがおなか辺りにあるポケットから変わった道具を出すのを見ているかのような顔をしている。

例えが長い？うるさいよ。

丁度現在の時間で言う今は昼頃なので昼食タイム。

食堂から食べ物を持ってきて各々が食べているが、何故か孫権が俺に常にくっついていてる。

・・・懐かれた？

いや、それ自体は大変結構なんだが問題はこつち。

「なんだ？」

そう、見るからに不機嫌そうな甘寧が刺すどころかそこらへんのダイヤモンド程度なら軽く貫けるレベルの視線を終始向けているので最高に居心地が悪い。

個人的には仲良くしたいんだけど、取り付く島も無い。

あんまり嫌われる事はしてない筈なんだけどね。・・・まさか、嫉妬？

両手に花ってのは良い物だけど

「孫権、花には物によっては毒のある奴もあるんだ、これ覚えてお

「うう。」

「?いきなりどうしたの?」

「次の対戦相手は恋が出るらしいけど、対戦相手は誰なんだ?」

「あのね、貴方から切り出してきたのでしょうか?」

「・・・確か杜預って奴だったと思うけど。」

それでもちゃんと答えてくれる孫権はやっぱり優しい子だな。

最初はずっと食って掛かって来てばかりで少し苦労したが、最近はなんか・・・猫?みたいに見えてしょうがない。うん、可愛い。つて、

「杜預?そうか・・・杜預、ねえ。」

これは僥倖。まさか杜預と恋の対決か。

面白くなりそうだ。

「ねえ?貴方はどっちが勝つと思うかしら?」

「その前に孫権と甘寧はどう思う?」

今更だが呉の人は雪蓮と冥琳しか真名を受け取っていない。

それがどういふ事を意味するかは・・・今考える事ではない、か。この世界の人間で無い俺が真名の価値観なんて分からない。唯、大事なんだなあと思うだけ。

自分にとっては大事でも人にとってはそうでもないかもしれない。サッカーが好きの人にいくら野球が楽しいと勧めてもそれがその人と同様楽しく感じるとは限らない。

家族を大切にしている人には家族のいない人の気持ちが分かるとは言

いづらい。

口に出せたとしてそれは実を伴った事実なのかはその人がどう感じたかによるのだ。

「うーん、恋ね。あの武に勝るのはそれこそ貴方位じゃないかしら？」

「私も蓮華様と同意見だ。だからこそ飛將軍、天下無双と言われている。」

妥当。確か自信は無いが正史でも演義でも事1対1の武力に関しては張飛の方が関羽より上と関羽自身が認めている。

星も善戦するとは思うがあいつや莉羅みたいな全体的にパラメータが高いタイプはそれが長所と共に弱点だ。

だからこそ、俺の側近として置いている訳だが。

簡単な話、器用貧乏を最大の長所にしてしまえばいい。

言うは易し行うは難し。それが出来れば最初からしているだろって話だが案外出来ない訳ではない。

本来の総合的に見たパラメータで言えばこの二人は曹操に次いで高いポテンシャルを有している。

この世界においても頭を使う者、力を使う者、それをさらに騎馬を用いる者、謀略を用いる者と細かく分業化されている。

今から1800年以上前のこの時点で、一つの事に集中した方が効率が良いと分かっているからだ。

体が一つしかないのに同時に複数の事をやる事は出来ない。

であれば、全てにおいて優れている事に何の意味がある。勿論無い、と言いたい所だがそれは大間違い。

軍の中での情報のやり取りは大事。軍部と軍師達の間情報に誤差があつては困るからだ。

それは戦争で敗北を意味するに等しい。

では、例えば作戦の大元を取り仕切る軍師が倒れた時はどうすればいい？

そういつた時等、あらゆる状況に対応できる部隊があると軍は安定するものだ。

要するに軍においてのパイプライン、全体を見通しそれに各自対応できる独立部隊がそういつた所を補完すれば良い。

文武と忠誠心に優れ王佐の才に特化した者だけを集めた精鋭部隊。

軍においての何でも屋、遊撃と考えればいい。星と莉羅は性格、能力共に十二分に備わっている。

今後、どうなっていくか分からないがそれを実現する為にひっそりと修練と人材探し、いわゆるスカウトを行っている。

で、その人材の筆頭候補が杜預って訳だ。俺の見た限りでは

正史では元々武に優れていた人物だったが、自分で本を著する等勉学にも通じ、將軍として指揮能力も高かった。

が、馬には乗れなかったという。唯、例えこの世界の杜預がそうであつても、同じ馬に乗れなかった人物でもナポレオンのように活躍した人間も居る。

それに見た目からして体格で乗れないという事はなさそうだから乗馬スキルをあげる事も可能な筈だ。

馬超や張遼程の騎馬の扱いに長けた人物は居ないが一武将として最低限乗りこなす程度なら星達でも教える事は出来る。

そもそも、この世界の杜預は乗れるって可能性もある。

今更だが、どんな身分でも人材を上手く活用するのが曹孟徳。

この案は正式な名称、規模、その部隊が持つ権利等を決めずに簡易な書類提出のみで認可された。

「聞いてる？」

「・・・へ？」

「はあ、聞いてなかったのね。もうそろそろ試合が始まるわ。行きましよう。」

「あ、ああ。」

最近考え事ばかりで手元が覚束無くなってきたな。悪い傾向だ。

「それじゃあ行こうか。」

華琳 side

「どう致しましよっ？」

春蘭達と昼食をとっていると急に杜預が聞いてきた。

「何を、かしら？」

「宮京理がつくると言っている部隊の事です。それに誘われました。」

そうでしょうね。杜預の能力は全てにおいて秀でている、京理が案



を実現させたいのなら誘うのは自然な流れだ。

「そう。」

「私はどうすればいいでしゅ……いいですか？」

……噛んだ。勘だ神田漢だカンダタ。

「好きになさい。貴方は一匹狼、軍に所属していて私に真名を預けていないのは貴方だけよ？」

「真名を預けるは真の主に使えし時。それ以上でも以下でもありません。」

「何？華琳様が主として器が足りないと言っているのか貴様は！？」

「落ち着け、姉者。」

激昂する春蘭を宥める秋蘭。

「これが落ち着いていられるか！こちとら先の戦いでは功をあげる事も出来ず鬱憤が溜まっているのだ！叩き斬ってくれる！」

「失礼。春蘭様、器の大きさが問題ではありません。」

「では何が問題なのかしら？」

間髪入れずに聞く。良い機会だ、この杜預という人間は優秀だが何が欠けている。それが何かを見るとしましょう。

「……確かに曹操様は尊敬にあたいし、振る舞う姿もまた霸王の

それ。」

「それでもダメな理由は何？」

「完璧すぎであるが故、です。」

「完璧で言ったら、京理以上の人間は居ないと思うのだけれど？」

「宮京理は完璧ではありません。この度の戦いでそれが分かりました。」

「どついう事かしら？」

「宮京理は全てにおいて完璧だった。が、結果は負け。最善を尽くした？曹操様の知略が上回ったから？軍の規模で既に勝っていたから？」

それらは全て関係ありません。

曹操、馬騰、鮑信、宮京理。英雄と言われた人間の中でも最も完璧と言われているながら敗れた。

その結果こそが大事なのです。

負けるといふ事は完璧では無い、ただこれだけの話。

ですが、逆に完璧が負けを知る事は多大な意味があります。

苦しんでいる民の気持ちも、彼らの目線に立って初めて気付かされる物も有るのでよ。

元々あの男には興味がありましたので、貴方には感謝しています。ですから気持ちを抑えて貴方様に仕えているのです。」

「……馬鹿にしているのかしら？」

絶を構える。

この女は、元々仕えたかった人間の成長に一役買ったから仕えてや  
つていると言っているのだ。

また、それを見越して私に仕えていたという。  
舐めてくれるわね。

最後に一言付け加えて杜預は部屋を出て言った。

『それに、宮京理には人間として何か惹かれるのですよ。』  
と。

王佐の才と理（後書き）

たらららっ たらーん！杜預さんの謎度が10上がった。

ここで杜預の真名、独立部隊の名前を募集します。この字を使えとかみたいな制限は無いので宜しければ提案とかして貰えると作者歓喜！次投稿が早くなるかもーです。  
感想等も良ければお願いします。

## 浪々の始（前書き）

またもや遅くなってしまいました。

誕生日、クリスマス、年賀状作成、お正月、成人式。

流石師走、年末年始は忙しい時期ですね。

## 浪々の始

???? side

「はっ、はっ、はっ、はっ！」

やばい、やばい、やばい、殺される。  
これは夢か？なんだ・・・あれは？

歩き慣れ、目を開かずとも歩けるとまでは言わないが手に取るように分かる自分の城。  
今そこを全速力で走っている。

あれは我や鮑信様と同じではない。人という枠組みに当てはまるものではないのだ！  
絶対に、断じてだ！  
でなければ、あんな事があってたまるか！

私は、先の戦いで鮑信様に同行して、宮 京理という人間を見た。  
あれは稀代の大英雄と呼ぶに相応しい心技体を併せ持った、あの鮑信様ですら認める存在。  
半国の器、その二つ名に恥じぬ物を持っていた。  
鮑信様に会う前ならば・・・とそんな事を少しでも考えてしまった自分がどうしようもなく情けない。

が、そんな存在を見た直後の今でもはつきりと言える。

あれは間違いなく

「こんにちはー。」

!!!!!!

「・・・いつから、だ？」

分かっている。俺はこの女？に殺される。

先程出会って、初めから我とこれの関係は殺す者と殺される者でし  
かなかつた。

食物連鎖で言えば最も面積の狭い場所に位置する存在。

「何がー？」

抜けた声。

それとは正反対な殺気の質と量。

「いつから、ここに居た？」

歯がガチガチと震えている。これが戦を前にした武者震いであれば  
どれだけ良かった事か・・・。

今生きている。では、次の瞬間、我は生きているのだろうか？

・・・

生きていた。

では、次は？

ちゃんと地に足をつけて歩き回る事は出来るのだろうか？

嫌だ、死にたくない。我は鮑信様と天下を目指す、その為にこの世において生を授かり生きてきたのだ。それはいつまでも変わることなど無い。

「なんとなく、来るのが分かったの。」

満面の笑みを見せる悪魔。

あの鮑信様と打ち合うまでもなく一方的に虐殺したこれ。

「あ、そうだ。これな〜んだ？」

見ると、細長い針のような剣の柄に蹴鞠に使う球位の大きさの赤に濡れた装飾品のような物が付いていた。

そう、まるで人の頭位の大きさ・・・

・・・まさか

「これが、これが人のやる事かあ——————」

これに向かって斬りかかる。

どうせ、死ぬしかない。鮑信様に勝てない相手に我が勝つ等考えられない話。

そもそも鮑信様が信じた時点で我に生き続けるという選択肢は無い。

「ん〜？」

興味深いと言った顔をしたと思ったら、いつの間にか鼻と鼻が触れる所まで迫っていた。



「っ!？」

それでも出来得る限りの殺気をこれに向ける。

「それでいいわ。」

満足したのか、顔を離す。

地獄というものを体験した事はある筈無いが、今その一端を知った気がした。

「ん、貴方は今から私の部下ね。」

「・・・何を言っている。主を殺した相手に従う道理があるか？」

「ふふ、そういう刃向かってくるような人間を屈服させるのが私の一番であり唯一の楽しみなのよ。」

「ここにも、その為に来たんだから。」

「我に用があつたのなら鮑信様に手を出す必要等無かつただろう!？それに・・・我にそんな価値は無い。」

「ふふ、英雄は普通優秀な主であればある程良いつて考えだと思つていただけ違かつたのかしら？」

「それだけの為にこれほどの事をやったというのか？」

「それだけ？私にとっては重要な事よ。」

呆れるどころか笑うしかない。

鮑信様ではなく我のような凡夫を手に入れる為に城の正面から堂々

と先程まで居た玉座の間までやって来て有無を言わず一太刀の元に鮑信様すら殺した。

悪夢なんじゃないか？夢であるなら醒めて欲しい。

「……貴様、名はなんという？」

自分自身が発した言葉にびっくりした。

つい先程、自分の主が目の前に居る人間に殺されたというのに我は何を言っているのだろうか。

「人に名前を聞く前に、まずは自分から名乗りましょう。」

声は終始軽い感じ。気さくな私塾の先生といった感じだろうか？

「我は、張ちやん？。貴様の名は？」

「私は董卓よ。」

「……偽名しか名乗るつもりはないと？」

「ふふ、本名なんだけどねえー。」

董卓は死んだ。

それは分かり切っている。話だ。

「我を従えたかったのは何故だ？」

「第一に屈服させたかったから、第二に手伝ってもらいたかったから。」

「手伝う？何をだ？貴様なら我がいなくとも大抵の事をやってのけるだろう。」

それに、我を屈服させようと思ったのは何故だ？」

「次に狙っている相手がいてね、それが今までの相手は格が違うのよ。よよよ。」

屈服させようと思った理由・・・ぎらぎらした野心を一番感じたからね。」

嘘泣きをしながらそんな事を言う。

「いつ見かけた？」

「ん？もちろん董卓軍と戦っている時よ。連合軍側に人探しも兼ねて参加してたのよ。」

その時、お目当ての人物を探している時に俺を見かけた。そういう事か。

今更だが、容姿は整っている。

薄紫の少し男っぽい髪形に、パツチリした目、身長は我より少し低い位か。

見た目はこれだが鮑信様にここまで圧倒した女。

そんな奴が我の手すら借りたいと思わせる人間・・・だと？

おそらく我の見立てでは1対1でやりあえる人間等それこそあの飛將軍呂布位ではなかるうか？

・・・！？

「まさか、その狙っている相手というのは

半国の器、宮 京理か？」

「御名答。」

乾いた笑い声が主の居なくなった城に響く。

「はは・・・は。」

こいつは・・・個で強いだけの単なる馬鹿なのかもしれない。  
先程味わった恐怖を既に忘れて更に親近感を抱いている我を貴方は  
どう見ますか？ 鮑信様。

宮 京理に向かうという事は即ち曹操と対峙する事。

・ ・ ・ 華琳、か。懐かしいな。

## 浪々の始（後書き）

杜預の真名と隊の名前引き続き募集中です。

ちょっと、オリキャラ出過ぎてきたっぽいですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6043y/>

---

嘘と珈琲

2011年12月28日06時55分発行